大学中期における適応感と自己概念との関連

○鈴木公基¹・鈴木みゆき¹

(¹関東学院大学)

キーワード：適応感，自己概念，大学生

The association between adjustment and self concept in middle undergraduate period.

Koki SUZUKI¹ and Miyuki SUZUKI¹

(¹Knato-Gakuin University)

Key Words: adjustment, self concept, undergraduate student.

目 的

大学期の適応においては、その発達課題とも相まって自己が重要な意味をもつと考えられる。大学中期には、専門的な学習の深化や将来の就職・進学など、様々な移行課題が顕現化することとなる。これらの課題に対処するためにも、それまでの大学生活で育んだ自己とはまた異なった、新たな自己の再構成も必要となるだろう。大学中期に求められる自己が形成されてこそ、この時期の適応がもたらされると考えられる。しかしながら、どのような自己を形成することが、大学中期の適応をもたらすのかということについては、その資料が十分に蓄積されているとは言い難い。

本研究では、大学中期にあたる3年次生における自己概念と適応感との関連について探索的に検討し、大学中期の適応に影響を及ぼす自己概念の様相について明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者 大学1年生99名(女83名、男16名。平均年齢20.44歳)。

質問紙 ①適応感尺度：大久保(2005)が作成した学校への適応感尺度を使用した。4つの下位尺度からなる(Table 1参照)。②自己概念尺度：山本・松井・山成(1982)の自己の諸側面の構造尺度を参考にして作成した。10の下位尺度からなる(Table 1参照)。

手続き 大学の授業時間の一部を使用して質問紙を配布し、回答してもらった。なお、調査にあたっては、倫理的配慮をふまえた説明を行った。

結 果

適応感と自己概念のどの側面とが関連しているのかを明らかにするために、自己概念のそれぞれの下位尺度得点を説明変数、適応感の下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析を行った(Table 1)。

その結果、社交性と居心地の良さの感覚、課題・目的の存在との間に有意な、また劣等感の無さとの間に有意傾向の正の関連があることが示された。他者とうまく関わることができるという自己認識は大学への適応を全般的に促進する要因であることが示唆された。まじめさと居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感との間に正の有意な関連が示された。大学の事柄に責任感をもちきちんと関わっているという自己認識もまた適応感を広く促進する要因であることが示唆された。

その他にも、生き方は課題・目的の存在、劣等感の無さとの間に、知性は被信頼・受容感、劣等感の無さとの間に、ともに正の有意な関連があることが示され、自分の個性や能力に自信を持つことが適応感を促進することが示唆された。

また、経済力、優しさと有意な正の関連のある適応感の側

Table 1 現在の自己概念を説明変数適応感を目的変数とした重回帰分析結果

説明変数\目的変数	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	被信頼感・受容感	劣等感の無さ
社交性	.50 ***	.35 **	.12	.22 †
優しさ	.16	.04	.21 *	.16
生き方	.05	.34 **	.13	.31 *
まじめさ	.19 *	.26 **	.16 *	.02
性	.02	-.13	.21 *	.00
経済力	.07	-.04	-.18 **	-.07
学校の評判	.13	.14	.01	-.10
知性	-.17 †	-.01	.29 ***	.25 *
容貌	.02	-.06	-.05	-.09
趣味や特技	-.09	-.07	.03	-.36 **
R ²	.53 ***	.46 ***	.63 ***	.35 ***

Note. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

面も示され、限定的ではあるものの適応感を促進しうる要因であることも示唆された。趣味や特技は劣等感の無さとの間に有意な負の関連を示し、適応感を阻害する要因であることが示唆された。

考 察

以上の結果は、鈴木(2016)の大学入学期における適応感と自己概念との関連の結果と一部異なるものであった。

大学入学期に適応感と一定の関連を示していたが、大学中期ではその関連が弱まった自己概念の側面として、優しさ、容貌をあげることができる。また、大学入学期より大学中期の方が関連が強まったものとして、まじめさ、生き方、知性をあげることができる。優しさや性といった他者との関係に関するポジティブな自己概念は大学初期では適応感を促進するが、大学中期ではそれらの要因の影響は相対的に弱くなると考えられる。一方、まじめさ、生き方、知性といった自己の人格や能力に関するポジティブな自己概念の影響が強まると考えられる。

このような適応感と関連する自己概念の変化は、大学生活の時期やその質の違いによって重要な自己の側面が異なるということを示唆している。このことを考慮すると、大学適応を目指しての支援のあり方も、その時期や質、および個人の発達状況によってその方法を変化させるべきものと言えるだろう。

引用文献

- 大久保智生(2005). 青年の学校への適応感とその規定要因：青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究 53, 307-319.
山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.